

現代アメリカ資本主義とドルの問題 : この問題のための一つの序説

高木, 暢哉

<https://doi.org/10.15017/4362509>

出版情報 : 経済学研究. 26 (5/6), pp.109-119, 1962-04-25. 九州大学経済学会
バージョン :
権利関係 :

現代アメリカ資本主義とドルの問題

——この問題のための一つの序説

高 木 暢 哉

は し が き

わたくしは一九六〇年から六一年にかけて約一年ばかり日本を離れていた。ちょうどイギリスにいたとき、アメリカからのおびただしい金の流出、ロンドン金塊市場の高騰を経験した。一九六〇年秋のことだ。そのとき、なにかと感ぜたり考えたりすることが多かった。それをなにかの仕方で書き止めておきたいと思うようになった。立入っての細かい吟味は、ゆっくりあとからすることができるとは、感じただけでも記しておいて、将来の検討の手掛りにでもすればよい。そういうつもりで、いわば覚書のようなものを書き始めてみた。以下に記すところは、その「序論」ともいうべきものにあたる。

ところでこのたび向坂教授の還暦を祝っての論文集が編集されることになった。このように高い趣旨で出される論文集に、まだ未熟で、しかもその「序論」でしかない部分を掲載することについては、もちろん私としては躊躇を感じないわけではなかった。けれどもまた考えてみて、これが自分としては、ここしばらくの研究の一つの出発点であって

もみれば、意味のあることのようにも思われた。向坂教授が斯学に寄せられたあの高貴な献身の精神に、わずかなりとも、あやかりたいと願つたのである。

序論 問題と視角

第一節 こころの視角

昨年秋から今年の初めにかけて世界の経済を驚かせた最大の問題の一つは、アメリカ合衆国からの急激にして多量におよぶ金の流出であった。いまから十二年もまえ、すなわち一九四九年九月には、アメリカ合衆国は二四六億ドルも金をもっていた。これは当時としては、自由世界でもっていた金準備量の約七割にあたる。ところが今年の初めには、アメリカの金保有量は、一七九億ドル見当にまで激減した。自由世界の金量の約四割ほどだ。アメリカからの金流出が著しくなるにしたがい、金買上価格の引上げとか、ドルの切下げなどが、うわさされるようになった。昨年秋には、流出金量は激増して、ドルへの不安は高まっていた。ロンドンの金塊市場では、金の価格は暴騰した。自由世界における通貨金融体制の基礎が揺いだ。このときにアメリカ政府の最高の責任を負うことになったケネディ新大統領は、なんにも先んじて、まずドルの防衛ということに、その施策の着手を集中せねばならなかったことは、まだ記憶に新しい事実である。

しかしその後の推移は、むしろ意外なほどに状況は明るくなってきた。先任のアイゼンハウアー大統領が先んじて行い、また引き続きはケネディ大統領がとつた緊急の諸措置が、少しずつ効果を奏してきたことも事実である。しかしまた他方では、アメリカの景気が、とくに輸出の面で、なにかと好転してきたということも、理由の一つとしてあげら

れてよからう。金の流出は、今年の第二四半期が始まるころには、どうやら収まってきたかにみえる。アメリカ経済は、ドルの危機という嵐の海路をすでに乗切ってしまったという安堵が各方面にみられる。そうしたあとに続くのは、穏かで平和な航路だけなのであろうか。金流出のごときは、ここ当分は、もう起りえないと思われるアメリカ経済の状況であらうか。このたびの危機からひとまず脱したことは事実である。けれどもそれは外見のことで、さきに金流出を生ぜしめた根因がアメリカ経済の内部からすっかり取り除かれているかといえ、そうとは思えない。むしろ原因は内攻し、累加し、潜勢力を貯えつつありはしないであらうか。そうとすれば、こんどはもっと激しい形をとって、ふたたび発現しないとも限らない。ここが実は問題だ。

このたびの金流出を単に一過的に単純な貨幣的現象とみるには、事がらは、もっと複雑なもののように思われる。それは確かに一つの貨幣的現象ではあるが、実は深く、ここ十数年来のアメリカ経済に特有な循環や、またそれをそのように動かしてきた諸施策や諸規制に根ざしているもののようにみえるのである。アメリカ経済に特有な循環や過程やその性格が、世界経済の一つの局面および一定の状況に遭遇して、金の流出となって現われてきた。なるほど金の流出は、その後の措置や経過のうちに、このたびは、どうやらおさまった。けれども、それを生ぜしめるにいたったアメリカ経済に内在する根本の原因は、まだ除き去られたとは思えない。除き去られていないとすれば、状況がふたたび熱せば、また発現することにもなるであらう。このたびの金流出にあたって、すでにいくつかの措置がとられてしまっているあとのことではあるし、この後に起りうる金流出に際して打つことのできる手段は、それだけに減ってきているわけである。それを防止しようとするそのときの努力は、それだけいまよりも困難を感じざるをえないであらう。しかしそのことよりもむしろこの際注意しなければならぬことは、現在ケネディ大統領がとりつつある景気対策上のさまざまな

施策が、実はかえって一つ一つ、将来起りうべき金流出の種をまきつつあるのではないかという疑いである。アメリカ経済の内部にすでにその種がまかれてあつて、それが発現した今回の金流出であつたとすれば、同じことが将来ふたたび起りえないという保証はないのである。

いずれにしても、金流出の問題を、単に国際的貨幣流通の分野に現われるただの貨幣の問題という程度に狭くおし止めて理解するのでは足りぬようだ。それでは視野はまだ一面的で、考察それ自身の意味も少い。むしろこの問題は、すぐれて現代のアメリカ経済、すなわちその資本主義に特有な性格や循環や過程にかかわりをもつ。もともと現代アメリカ資本主義に内在する諸矛盾から生じた金流出という現象であつた。したがって金の流出は、この現代アメリカ資本主義の把握という内面的立場からのみ、その徴候として、またはその指標たる意味において、よく明らかにされうることである。しかも金の流出が、なぜにかくも痛切にわれかれの関心を引きつけるかは、それが現代資本主義の内奥と切っても切り離せぬ関係にあるからだ。現代アメリカ資本主義の構造や過程や矛盾の貨幣面に現われた発現として、金流出の問題は、解明されうるし、解明されるべきであらう。と同時に、現代アメリカ資本主義の性格や過程は、このよるような金流出という発現を国際的貨幣流通の部面に不可避にもたざるをえないものとして把握されるのでなければ十分ではない。

わたくしはここでは金流出ということから考察を始めた。またこれからの論述においても、アメリカにおける金とドル通貨などのごとき問題に、もっぱら吟味を集中させてゆくことになるであらう。しかしその場合にもわたくしは、そのことを、現代アメリカ資本主義の一現象面の把握という意味のとらえ方で、みてゆきたいと思つている。もとよりアメリカ資本主義経済一般ということについての検討は、ここでの中心的課題とはなっていない。やはり金やドルの間

題などに、おのずから考察は狭く絞られる。ただこうして絞られている固有に貨幣流通面に限定された考察には、現代アメリカ資本主義についての理解という展望が連らねばならぬという見地である。現代アメリカ資本主義という見透しをもちながら、ここでは単にその一面をだけ、すなわちそれが貨幣流通の面に現われるにいたったいくつかの事象にかぎり、集中して問題としてゆこうとするのが、ここでの私の立場にはかならぬ。けれども考察は、もとよりアメリカ資本主義という総体の理解のためになされるのであり、一方それは、現代アメリカ資本主義という視角を通じ、内部から外部へと、貨幣的事象をその外化された表現として、これをみてゆこうとするのである。

第二節 考察の手がかり

そこで話を前に戻して、金の流出ということについて考えてみることにしよう。近年アメリカ合衆国は、年々その保有する金をいくばくか失うようになって、その現在量は一七〇億台に落ちてしまった。どういうわけで金はこうして流出するようになったのであるか。それは周知のように、各国が莫大なドル債権をもつようになり、それを金に引き換えて取り出そうとするようになったためだ。ドル債権の集積ということが第一、第二には、それを金という形で持ち去ろうとする動きが生じたということ、この二つが金の流出をアメリカ合衆国が招いた主な原因、しかもその直接の動機となる起因であったことは、あらためて述べることもないであろう。そこで問題は、なぜにこのような起因が生ずるようになったかということになる。なぜにドル債権がおびただしく各国のもとに集積されるようになったか、またなぜにこうして集積されたドル債権が最近にいたって金の形で取り立てられるようになってきたか。戦後かなりの期間、ドルを手に入れる国はあっても、これを金に換えて持ち去ろうとする動きは少なかつた。それが最近にいたり、どういふわけで国々はドル債権を金の形で持ち去ろうと望むように変ってきたのであろうか。こういうことが問題になる。

アメリカ合衆国のドルが各国の手もと——といっても、主として先進工業諸国においてのことなのだが——において集積されるようになったのは、あらためて述べるまでもないこと、直接にはアメリカにおける国際収支が赤字に変わってきたためだ。国際収支が赤字になり、すなわちアメリカは外にたいし支払債務を負うようになり、したがって諸外国の立場からいえば、ドル債権をもつことになり、かくてこれらの諸外国は、アメリカの国際収支に赤字が打ちつづくにしたがい、ドル債権という黒字を年々累積させてゆくことになった。もっともここでいうドル債権なるものについては、形や期間などについて種々のものがあるが、その主たる形態はドル建の期間の短い預金か、大蔵省証券などのごとき形式である。アメリカからドル通貨で支払をうける諸外国は、しばしばそれをそのままドル建の預金としておいておく。というより、普通には、ドルの預金通貨という形でもつて、支払をうけるので、支払をうけることに預金通貨の形でドル債権が自然に累積されてゆくことになる。それがあつた場合には、大蔵省証券のごとき形に転化されて保有され、またある部分には、あまり期間の長くない有期の預金とされるのである。^{註一}もちろんこれを使用する場合には、ふたたび当初の予金通貨の形態に転化されることになるであらう。しかしそれはともかくとして、ここに問題は、なぜにアメリカにおける国際収支は、最近にいたり赤字に変わり、しかもそれがこうして打ち続くようになってきたか、ということである。

註

一 わが国の場合について、外貨の保有状況を述べてみると、まず第一に、外国為替集中制度によって政府(MOF勘定)および日銀に保有される分がある。外貨準備高として通常発表されるのが、それである。次に輸出ユーザンス残高、清算勘定、民間保有分のごときがあるが、商社や邦銀などが保有する民間保有高には制限があり、清算勘定の場合、いまは整理の方向にあり、流動性にも問題がある。輸出ユーザンス残高は、しだいに増加の傾向にあるが、もともと短期の対外債権で、その期間は最近になって四ヶ月まで延長されることになった。やはり流動性という見地から、国際的に支払手段在高としてみなされてよい外貨保有は、政府・日銀が保有する外貨準備高に帰着することになるわけだ。

ところで、この外貨準備高は、どういう内容になっているかという点だが、それに計上される外貨の種類としては、米ドルおよびこれに準ずる交換可能通貨、ならびに英ポンドということになっており、オープン勘定残高は計上されない。またその保有形態についていうと、金地金、鑄貨、紙幣、銀行引受手形、外銀預金、東銀特殊指示預金、米國財務証券のごときである。外銀預金の多くは有期の預金であり、日本の為替銀行などが輸入ユーザンスをうける場合などの基礎になりうる。米國財務証券のごときは、市中への売却によって直ちに現金化することができるから、手許現金在高のもっとも流動的な運用形態といえるであろう。この八月末におけるわが外貨準備高の状況は、大約次のごとくであった。

金	地	金	二億五〇〇〇万ドル				
外	銀	預	金	四億	ドル		
東	銀	指	示	預	金	一億	ドル
米	國	財	務	証	券	六億九〇〇〇万ドル	
そ	の	他				二億八一〇〇万ドル	
計						一七億二一〇〇万ドル	

ここ最近のアメリカの國際收支の内容について調べてみることにしよう。國際收支の内容としては、まず第一に貿易收支というのがあつた。貿易收支が悪化して、アメリカの全体としてみた國際收支が赤字に交つてきたのであろうか。そうとも考えられるふしがある。アメリカは、それまで年々四、五〇億ドルもの貿易の黒字を続けてきた。これでもって國外にたいし、軍事援助や經濟援助のごときを悠々としてゆくことができた。ところがこのような莫大な黒字がここ数年來減少してゆき、一昨年のところでは一〇億ドルくらいに減つてきた。輸出が伸びなやみ、輸入が増大してきたからだ。したがってもしも國際收支における他の支払項目の状況にして大きな変化がないならば、貿易上の黒字の減少

は、当然に総合収支の上にはねかえってきて、それを赤字に転換させざるはずである。対外軍事援助や経済援助などのごとき貿易外の収支においては、赤字はこの数年来ひき続いて五、六〇億ドルのところで、あまり大きな変化はない。そこで結果として出てくる総合収支は、ここ二、三年このかた恒常的に三、四〇億ドルの赤字を示すようになった。このためになされるアメリカがわの支払は、当然に相手国の保有するドル債権への追加となり、それを累増させてゆくことになった。もつともそのうちのある金額は直接に金で引き出されていった。それはアメリカ合衆国の保有金を減少せしめる原因となる。現在、国際機構および諸外国が保有しているドル債権の総額は、二〇〇億ドルばかりとみられている。そのうち約一〇〇億ドルくらいが、政府や中央銀行などの保有という。この一〇〇億ドルをもって、さしあたって金の流出のいちおうの限度とみなすことができるであろう。現在、アメリカ政府が保有する金分量は一七〇億ドルちよつとであるから、相当切迫した状態にあるとみななければならない。しかしそれはともかくとして、貿易の上での黒字の減少が、アメリカの国際収支を悪化させ、諸外国の手もとに多額のドル債権を集積せしめ、金流出をひきおこす原因の一つとなっていたことは、疑えない。

しかしこういったいちおうの考察も、もう一歩立ち入って考え直してみる必要がある。というのは、金流出のはなはだしかった昨年度の貿易については、むしろ前年度にくらべて黒字のはばは大いに改善されているからだ。昨年の秋といえば、金流出のもつともはなはだしかった時期であるが、そのころには年度で三、四〇億ドルもの貿易の黒字がみこまれるほどに明るい見透しが立ちかけていたときだった。にもかかわらず、金の著しい流出が生じた。なぜであろうか。このときにドル資金の海外への移動が急に激しくなってきたためである。資本収支の面での赤字の激増が、総合としての国際収支を突如として悪化させた。諸外国の保有するドル債権は増大し、一方ではこれは金に換えて取り出され

た。国際的資本の移動ということ、このことが、すでにその前より始まっていたアメリカからの金流出を昨年になって劇的なものにした直接の原因でなかったかと思われる。

しかもこのときにいたって、同時に、ドル通貨についての不安があった。戦後しばらくのあいだは、ドル債権を手に入れても、これを金に換えて持ち帰ろうとする国は、あまりなかった。それがここ数年來、金への引き換が、しだいに要求されるようになったのである。ドル貨がもはや以前のように不足でなくなってきたことも、一つの理由である。先進工業国は、すでに相当豊富にドル債権を貯えるようになった。そこでこれを一歩進めて、社会的絶対的富の形態である金に換えて保有したいと願うようになるのは、当然のことだ。歴史的伝統的にも、とくに西欧諸国民のあいだには、いままなお感情としては、金への愛着というものが根づよく生き続けていることは、いうまでもない。ことに、第二次大戦のあいだに金準備を失った諸国の政府や中央銀行の立場としては、それをこのさい補い、または回復したいと願うことになる。こういう理由から外国の政府や中央銀行が保有のドル債権を金に換えようとしているあいだは、別に問題はなかった。金流出の程度や速度には、おのずから限度というものがあろうから。昨年秋というあのととき、あのような形で、あのような分量と速度で、金流出が起ることはなかったであろう。ロンドンの金塊市場にも、あのような異変は起らずにすんだであろう。世界の人々も、あのととき、あのような仕方では、驚くことは、しなかったであろう。わたくしはここでは、政治上の原因については触れないことにする。もっぱら考察を経済上の要因に限る。その場合に、ここにもう一つ、特殊に根深く経済的な原因が潜んでいたものと思われる。

それはドル債権の形で保有するよりも、金に換えて保有する方が明らかに有利と思われるような事情が生じていたからだと思われる。金で保有するよりもドル債権という形で保有する方が、なにかと便利で有利であると考えられていた

あいだは、金でする準備の保有をとくにふやそうと考へつきはしなかつたであらう。少くともさきごろのように、必要と思はれる以上に金で準備しようとする動きは、生じはしなかつたであらう。ところがこのごろの動きには、ドル債権で保有するよりも金で保有する方を有利とみるかのごときふしがみうけられる。各国の政府や中央銀行は、ドル債権よりもむしろ金の形での保有を望んでいるかにみえるのである。これは、なにを意味するであらうか。ドル通貨の価値に比べて金の価値がいまではすでに大きくなっているか、または少くともやがては大きくなるものと予想されていることであらう。比較的価値が少いか、または少くなるであらうと予想されるドル通貨の形を捨てて、それよりも比較的価値が大きいか、または大きくなるであらうと思はれる金の形で、直ちに、富を保有したいと願うのであらう。金における価値の変化は、実はなかなかつかみにくい。けれども現在における金資源、産金の技術および金をめぐる需給の状況などから考へて、この最近になって金の価値が諸商品の価値に比べて大いに下落したと思はれる証拠はない。これと違って、ドル通貨の価値がこの二、三十年來、減り続けていることは、その後の物価水準の高騰や、および労働生産力の向上などからみて明らかである。そこで、価値の減った、または価値がさらに減り続けるであらうと想像されるドル通貨よりも、直々に、価値の実物形態である金の姿で富を保有しようとしたものと考えられる。金塊市場における価格が高騰したのも、このためだ。なにがドル債権をして金へと逃避せしめたのかと考へてきて、極めて自然に、ドル通貨における価値の減少という問題をせざるをえなくなってくるのである。

ドル通貨の価値の低下ということも、国際収支の悪化ということも、また国際的資本の移動ということも、実は無関係には起りえない一連のからみ合った現象なのである。国際収支が悪化すれば、ドルの為替相場は弱くなり、国際的資本の移動をひき起し、また一方ではそれは国内物価の上にはねかえり、ドル通貨の対内価値の上にも影響を及ぼしてく

ることなる。そしていずれも現在では、現代アメリカ資本主義の構造や特質の現われでないものはない。それらは相互にからみ合い、作用し合い、強め合い、相殺し合つて、現代アメリカ資本主義の現実の徴候または過程を形づくっている。現代アメリカ資本主義は、現実にはこのような徴候または過程をとりながら機能しており、その本来の性格や特質は、このような過程または徴候を通じて現実には発現しているものと、いつてよからう。かくてわれわれは、このような関連する全体のために、全体の立場から、それにとつては個別的具体的発現であるさまざまの要素のさまざまの過程や機能を明らかにし、関係づけてゆかねばならぬのだから、もちろんそれは一挙になしとげうるようなものではない。むしろ一つ一つをとつて明らかにし、関連づけ、単純から複雑へ、部分から全体へと、順を追つて考察を進めてゆくよりほかはないのである。それは、およそいずれの考察におけると同様だ。

わたくしはこれから順序として、まずドル通貨の価値の低下ということをもつて、考察を出発させてゆきたいと思う。そこから自然に国際的資本の移動のごとき問題に移り、さらにさか上つては、その背景となる現代アメリカ資本主義の循環の様式や特質のごときを検討し、ふたたび帰つて、ドルの現状または将来といったこと、および国際的流動性強化のための政策やその展望のごときに触れてゆきたいものと願つている。^{註一} (一九六一・九・二四)

註一 これに引き続き論文として、わたくしは、「バンキング」誌一九六二年一月号に、「通貨ということ」と題して、稿を寄せた。さらにひき続いて、書いてみることによつて、「現代アメリカ資本主義とドル問題」のおおよその輪郭だけでも描き出してみたいと思つてゐる。